

イラクで何が起きているのか

つくられた「内戦」

細井 明美

05年5月イラク暫定政権が発足してからのイラクは、それまでと様相を少し違えてくる。具体的に書くと、その頃からバグダッドの町に拷問死体が発見されるようになった。頭に電気ドリルの穴がある手錠をはめられ、首から下腹部まで縦に切られている。その対象は宗教指導者から十代の若者まで、その多くがスンニ派の男性たちだ。共通していることは、彼らがイラク治安部隊に拘束されていた者たちだったこと。

つまり、バグダッドの治安がイラク暫定政権に委譲されてからバグダッド市民にとっての恐怖の始まりだったのだ。シーア派の民兵たちと治安部隊が市中を跋扈し、スンニ派の人々を町から追い出し始めた。空き家になった家にイラン人が住み始めたのもこの頃からだ。

恐怖は、イラク治安部隊だけではない。車に乗ったスナイパーが通りを歩く人々を銃撃する（これは対象がスンニ派とは限らない）。ある医師は、賑やかな通りを娘さんとショッピングしていたところを銃撃された。彼は脊髄を損傷する重傷、娘さんは即死。摘出された銃弾はダ

ムダム弾（弾丸の先端に十字の切れ目があり着弾すると四方に飛び散る）だった。ついでに書くと、イラクで米軍が使用している銃弾は、私たちが知っている通常の弾薬（鉛）ではない。中に熱い液体が入っていて、着弾すると燃える（イラク人の証言から）。空気にふれると燃え始めるのは燐が入っているせいではないかと想像されるが、はつきりしたことはわからない。

話を元に戻そう。イラク治安部隊の自宅搜索はIDリストに基づき、イラン・イラク戦争当時兵士として戦った人間たちがその対象と言われている。現在の政権がイランの支援を受けるSCIRI（イラクイスラム革命最高評議会）中心であることを見れば十分考えられる。一方、米軍の自宅搜索は夜中に起きているものかたつぱしから拘束して基地に連れていく。これはひとつにはイラク人通訳が不足しているためだ（今や米軍の協力など誰もしない。協力していることがわかったら反米組織から殺されてしまうだろうし、親族の誰かが米軍に殺されている）。

05年の終わりに米軍はイラク内務省の秘密刑務所を摘発して、収容されている

人々を解放した。これなど米軍がいかにもフェアなことをしているかのように見せかけているが、アンバール州で行っている殺戮は残虐で非人道的だ。

06年に入り、バグダッドでは自動車爆弾により連日多数の被害者が出ている。被害者はスンニ派、シーア派、警官などなど。ありとあらゆる人々がターゲットだ。そしてイラク・ラマディでは、5月からファルージャの再来とも言われる米軍による掃討作戦（殺戮）が始まった。ライフラインを閉じ、町の周囲を取り囲み、ラマディの町そのものが刑務所のようになっている。家々の屋上に米軍スナイパーが占拠して、動くものを銃撃する。

スンニ派とシーア派が殺しあい、内戦が起きているかのような情報を日本のメディアは流すが、果たしてそうだろうか？ 私にはイラク民衆がジェノサイドに耐えているとしか思えない。

バグダッドで頻繁に行なわれている「自動車爆弾」は、中東でイスラエルのモサド（内務機関）がイスラム過激派を暗殺するときの方法だ。レジスタンスはもつと安価な方法、路上爆弾で米軍を狙う。いずれにしろ、バグダッドの人々はイラクを捨て、近隣のイスラム諸国に避難を始めた。

（ほそい・あけみ、「イラク女性リバーベンドの日記」訳者）